

渋谷仁崇・西宮市立浜脇中学校主幹教諭（日本新聞協会 NIE アドバイザー）  
昨年の宮崎大会に続いて、今年も NIE 全国大会、愛媛大会に参加した。

今年のテーマは、「ICT でひろく NIE 新時代」である。

日本新聞協会の中村史郎会長、愛媛県の中村時広知事、松山市の野志克仁市長、愛媛新聞の土居英雄社長のごあいさつでは、愛媛県の素晴らしい魅力だけではなく、行政、教育、メディア、家庭が一丸となり、子どもたちの可能性を最大限にひろげる環境づくりを目指して取り組んでいることを強く感じた。

初日、松山空港から大会会場へ移動する道中で、路面電車に乗りながら町の風景も楽しみながら窓の外を眺めていた。街の一部しか見ていないが、伊予の蜜柑（みかん）色に染まる街であった。路面電車、路線バス、看板、マスコット、あらゆるところが明るいオレンジで街が染まっている気がし、街の一体感を感じた。

パネルディスカッションでは、教諭、教育委員会、小学生、企業、新聞社社員ら、職種や世代が違う方々の考え、愛媛県内の取り組みの最前線を聞いた。

「ICT でひろく NIE 新時代」をテーマに議論が進む中で、愛媛新聞社の取り組みである「e スタディ」に特に興味が出た。愛媛新聞社が学校教育で活用することを考えたインターネットを活用した新聞素材である。それらを県内の各学校が、多角的、多面的な学びを進めるために活用し、学びを深めている。このような産学交流が素晴らしい。

2日目の分科会では、愛媛大学教育学部附属中学校の公開授業に参加した。

「読み手の立場を超えて取り組む探究活動」をテーマに、読者・記者・取材対象者の3つの視点から、生徒たちが記事を通し、それぞれの思いを直接聞いて理解することで、記事を深掘りしていく。生徒たちが今後のよりよい生き方を考えることにつながる、すばらしい実践であった。

ある生徒は「取材対象者が仕事を選んだきっかけを知ることができ、今後の探究活動や総合的な学習につながられると思った」と話した。

松山市立久谷中学校は「持続可能な町づくりを考える」をテーマに、e スタディや朝日デジタルを活用し、地域活性化の参考になる記事をロイロノートにまとめていた。そこから地域の方々をゲストティーチャーに迎え、町づくりの提案の根拠となる記事選びや議論を行い、課題への学びを深めた。2学期、この学びから実際に提案

を行い、学びを広げていくことに興味があった。

本校も NIE 活動を通し、SDGs（国連の持続可能な開発目標）の「住み続けられるまちづくりを」を具体的に考え、主権者を育む取り組みを続けている。生徒が考えたアイデアや提案を具体的に実行するため何をしたらいいのかを考えたい。

午後からのNIEアドバイザー会議では、全国のNIEアドバイザーから実践例の紹介があり、全国大会の公開授業の感想も出された。佐賀県の先生は「親子新聞」づくりに取り組んでいる。日本新聞協会の関口修司コーディネーターも「保護者を巻き込むよい取り組みだ」と助言されていた。兵庫県でもチャレンジしてみたい。

2日間を通して、教育の中心には、「思い」があると強く感じた。地域社会、学校側、家庭がいかに目の前の子どもたちの「可能性を引き出すか。

また、生徒たちは将来、どのような「社会を創る一員になる」のか。本校でも「NIEノート」や「朝NIEワークシート」などの活動を通して、産業界と大学との連携を具体化させている。それぞれの分野でできることは限られているからこそ、NIEを通しICTを活用して、目まぐるしく発展する社会全体の中で「具体的に何をどうできるのか」「目の前の課題をどう解決していくか」を考えたい。

主体的に学ぶ生徒を育て、誰ひとり取り残さずに育んでいく活動を続けていく思いがさらに高まった。

#### 西村 哲・西宮市立浜脇中学校教諭（日本新聞協会NIEアドバイザー）

「いのちを守る 言葉を育てる」。記念講演された俳人・夏井いつき氏の言葉は、われわれNIE関係者に役割を再認識させる契機となったように思う。

「命の守り方を伝える」のが教育だ。夏井氏の場合であれば、命を守るための「言葉」を伝え、磨いていく。そのための「道具」が俳句。俳句に全力投球する人生とは日本中、世界中の人々に「命を守る言葉」を伝導する人生なのであった。すごい。すごい迫力だ。すごい実践力だ。自分もそんな実践をしてみたい。そう思った。

「私は俳句で挑戦してるけど、あなた方は新聞で挑戦すればいい。さあお手並み拝見」と、夏井氏は壇上で眺めておられたのではないか。命の守り方を伝えるために、「新聞」をどう活用したらよいのか。これは夏井氏からいただいたわれわれNIE関係者の「夏の宿題」なのではないか。そう考えた僕は、パネルディスカッションや分科会で何かヒントはないかと凝視しまくり、聞き耳を立てまくり、自問自答しまくりの2日間を送った。

分科会で、「読み手の立場を超える」という発想に出合った。そこでは、記事を書いた記者や記事の取材対象者をゲストティーチャーとして招へいするという手法で、記者魂や、取材対象者の生き様と出合わせる中で、自分の生き方、すなわち「命の守り方」を考えさせていた。

さあ、自分はどんな授業をつくろうか。どんな授業で、「新聞」を使って「命の守り方」を学ぼうか。実にやりがいのある夏の宿題との出会いー。そんな愛媛での2日間だった。

若生佳久・明石市立大久保小学校教諭（日本新聞協会 NIE アドバイザー）

8月3日と4日に NIE 全国大会松山大会に参加した。

初日の記念講演は、テレビのバラエティー番組「プレバト」での、俳句の審査や添削、解説で有名な俳人・夏井いつき氏。演題は「いのちを守る 言葉を育てる」であった。

俳句は、たった 17 音で自分の思いや情景を表現しなければならない。そのため、言葉を取捨選択し、精選し、言葉の順序まで熟考する必要がある。特に助詞の使い方で表現が変わり、イメージがガラッと変わることを、千原兄弟の千原ジュニアさんの俳句を例に話をされた。

「言葉」は、その「力」で、人を「生かし」も「殺し」もすることができる。「言葉」を大切にし、「言葉の力」を熟知している氏であるからこそ、「命を守るために、言葉を育てる」大切さを訴えた講演であったといえる。

昨今の SNS（交流サイト）で言葉の暴力により、傷つけられる人々、言葉によって奮起し、勇気をもらう人々が多数いる。そんな時代に入っている今だからこそ、「言葉」を育てる必要があるのではないかと考えさせられた。

続くパネルディスカッション「ICT でひらく NIE 新時代」では、NIE における紙と ICT の関わりについてそれぞれの立場を通して話が出された。

コロナ禍から3年がたち、学校では1人1台のパソコンやタブレット端末を使用する時代になった。その結果、徐々に ICT の活用の成熟化がなされてきている。

紙の新聞とデジタルのニュースをどう活用していくか、過渡期である今の実践が発表され、今後の NIE 活動への指針となった。

2日目は、小学校の実践発表と「クロヌリハイク」の分科会に参加した。

小学校の実践発表では、2学期からすぐに実践できそうな「百マス作文」や「eスタ（愛媛新聞が行っている事業）」を活用した実践を知り、兵庫県でもこのような実践ができれば（無料で）という感想を持った。

「クロヌリハイク」は、新聞記事から季語や言葉を見つけ、それ以外の部分を黒塗りし、俳句をつくるというワークショップである。

非常に楽しく俳句作りができた。これも2学期にさっそく実践していこうと思った。

このように全国大会は、参加するたびに新しい発見や学びを得られ、有意義な時間を過ごすことができた。

来年は京都。再来年は神戸である。再来年を視野に兵庫の実践を全国に発信する内容について考え、実践していきたい。

**三嶋祐貴子・高丘小中一貫校明石市立高丘中学校教諭（日本新聞協会 NIE 実践指定校実践代表者）** パネルディスカッションでは、「ICT でひらく NIE 新時代」というテーマにのっとり、授業の資料としての使い方、進路時の情報や新聞づくり体験などさまざまな意見を、立場の違う方から聞くことができた。生成 AI が普及していく中で、情報活用能力をどう高めていくか、紙とデジタルの使い分けをどうすすめるかなど大変参考になった。

分科会では、各新聞社のデジタルコンテンツの使用方法や使用例を聞くことができ、自身の社会の授業に取り入れたいと思った。また、愛媛県内子町立内子中学校の実践発表で、委員会の縦割りを活用し、3 学年を通して新聞記事について話し合うという取り組みを聞き、本校での小中一貫の活動に活かしていきたいと思った。

全国大会へ参加することで、愛媛だけでなく多くの地域の取り組みを知ることができ、意識向上につながった。この学びを生徒たちに還元できるよう頑張りたい。

**彦野周子・愛徳学園小学校教諭（日本新聞協会 NIE 実践指定校実践代表者）**  
松山市で行われた NIE 全国大会に参加した。

正岡子規などの文人を輩出した松山市は「ことばのちから」をキーワードにまちづくりを行っていて、街を歩けば市民が作った短文や俳句を至る所で目にすることができる。

会場になった県民文化会館には、47 都道府県から、教育・新聞関係者約 1200 人が集い、活気があふれていた。

初日のパネルディスカッションは、大会スローガンでもある「ICT でひらく NIE 新時代」をテーマに行われた。年代も職種も異なる 5 名のパネリストが登壇し、紙とデジタルそれぞれの特長を生かした新聞活用法を考えた。特に印象的だったのは、Z 世代代表と紹介されていた愛媛 CATV の野添美来さんが、紙とデジタル両方の良さについて経験を交えて語ったことだった。紙、デジタルどちらの媒体にもそれぞれの良さがあるため、教育の場で利用する場合には、教員がそれぞれの長所や特性を理解したうえで、子どもに選ばせたり、どちらかを提供したりして場面にあった使い方が出来たらよいと思った。

2 日目の分科会では、全学年で新聞スクラップに取り組んでいる西条市立吉岡小学校と西予市立皆田小学校の実践発表を聞いた。両校とも愛媛新聞社が提供している学校向け教育サイト（e スタ）を利用してスクラップを行っていた。

スクラップした記事の感想を書く作業を続けることで要約する力が身についたり、スクラップした記事を違う学年と共有することで興味の幅が広がったりする点がよいと思った。

2日間通してたくさんの貴重な学びがあった。大会開催に向けご尽力された方々に深く感謝したい。NIEを行うことが目的ではな、子どもの成長のための手段となるよう本校でも活動を精査していきたいと感じた。